酒田市立富士見小学校による
紙芝居「車いすユーザーの社会」の授業実践

以下は、2021 年 7 月 24 日（土）10:00〜12:00、山形県酒田市にある富士見小学校の佐藤克彦校長と黒沼誠教諭をお招きしオンラインで開催された第 14 回ダイバーシティ教育定例研究会（バリアフリー教育開発研究センター主催）の記録である。

1．授業実践の背景とプロセス

飯野：みなさん、おはようございます。東京大学バリアフリー教育開発研究センターの飯野と申します。本日の司会を担当いたします。本日は、山形県酒田市立富士見小学校から、佐藤校長と黒沼教諭にお越しいただいています。

タイトルは「酒田市立富士見小学校による『紙芝居　車いすユーザーの社会』の授業実践」です。「車いすユーザーの社会」とは、車いすユーザーが多数派、立って歩く二足歩行者と呼ばれる人たちが少数派という現実の社会とは逆転した社会のことです。少数派の不利や困難の原因は、社会が多数派に合わせてデザインされていることにあるという社会モデルの考え方を伝えるための寓話です。この寓話をもとに、2017 年、バリアフリー教育開発研究センターと日本ケアフィット共育機構が共同で、大人向けのアニメーションを制作しています。

今回、紙芝居と呼んでいるのはその子ども版になります。大人向けのアニメーションは、展開がスピーディーで良いのですが、子どもには少し難しいかもしれない。架空の世界だということがわからないままアニメーションを見てしまうかもしれないという懸念があり、大人向けとは別に子ども向けの教材を作りました。加えて、障害の社会モデルは社会の構造や社会の作られ方、デザインのされ方を問題にしているので、この視点から自分の身の回りの環境を見直していくためには抽象度の高い思考が求められます。そうした思考が一体何年生くらいからできるのか、また、その際にどういった流れで、どのような言葉を使って伝えるとより効果的なのかを試行錯誤しているところです。

山形県酒田市立富士見小学校は、この試行錯誤のプロセスにご協力くださっています。これまで、本日のスピーカーである佐藤校長と黒沼教諭の他、2名の通常学級の先生が紙芝居を使った授業を実施してくれました。今日はその取り組みの中で何が見

えてきたのか、どんな課題が浮かび上がっているのかについて、2人にお聞きしていきます。

まず、主に佐藤校長への質問になると思うのですが、この紙芝居教材を使った授業実践を始めようと思った背景や理由についてお話いただけますか。

佐藤：本校で紙芝居の授業実践を始めた理由や背景は大きく二つあります。一つは、本校の教育目標の具現化という点から。もう一つは、本校の伝統と児童の実態からです。

まず一つ目の本校の教育目標の具現化ですが、富士見小学校の教育目標は、「自ら仲良くたくましく」ということで、「自ら」のところは自立、「仲良く」のところは共生、そして「たくましく」のところはたくましさというふうに子どもにわかりやすく提示されています。真ん中の「仲良く」のところは共生が謳われています。これは、私の前の代のもっと前の代の校長先生からずっと継続されてきた目標ですが、多様性を強みとして課題を乗り越えていくこれからの社会においては、共生社会についての理解や意識づけが必要不可欠だろうと考えました。

本校の教育活動の中でも、この「自ら仲良くたくましく」の「仲良く」「共生」という部分の取り組みについて、強く打ち出していかなくちゃいけないなということで、一人ひとりの違いを認めるところからスタートし、いじめの未然防止や一人ひとりの学習保障に繋がるのではないかということで、こうした取り組みに関心を持ちました。

しかしながら、教員一人ひとりの考え方は多様で個人的な取り組み、つまりある先生だけ、ある学級だけという取り組みでは限界がある。学校としてのベクトルを揃えるために、共通の取り組み、共通の教材が必要だとずっと思っていました。その教材を探していたところ、昨年の11月に私が参加した研修会で、小学校向けの教材があるという話を聞いたので、「どんなものなのかな」と関心を持ちました。私としては、富士見小学校に入学し、ある学年になったら共生社会についての授業を受け、中学校や社会に出ていくっていうようなことの土台や基礎になればいいなという希望、願いを持っています。これが一つ目の教育目標の観点からです。

二つ目の本校の伝統と児童の実態からですが、私は、昨年度富士見小学校に赴任し、今年で2年目になるのですが、本校は伝統的に、一人ひとりを大事にする教育が行われてきた学校だと、他からも聞いておりますし、自分自身もそう感じています。たとえば、特別支援学級が職員室の目の前にあるという教室配置になっています。ですから、昨年4月に本校に初めて赴任した時に、特別支援学級を学校の中心に置こうとする意思を強く感じたのを覚えています。職員室と特別支援学級の物理的・心理的距離がすごく近いということも感じました。先生方は特別支援学級のそばを通って、

毎日自分の教室に行き、職員室に戻って来るというのが日常です。ですから、お子さんとふれあう機会が非常に多い。他にも、例えば保健室で過ごすお子さんもいます。それから、廊下を歩いていると、クールダウンしながら支援員の先生と一緒に歩いてくる子どももいます。要は廊下に出て気分転換とかクールダウンしながら、ちょっと教室を離れてまた教室に戻るというような様子を日常的な風景として昨年度感じました。

あと、本校は350人規模の学校で欠席が本当に数名です。1人、2人、3人っていうような感じで。途中から学校に来たり、早退したり、そういったお子さんが非常に多くて。昨年度は、黒沼先生の特別支援学級のクラスの不登校のお子さんが教室に復帰していることもありました。そのお母さんによると、学校が持っている雰囲気が非常にウェルカムって言いますかね、そういったものを感じたという言葉があって、そういうのが学校全体の雰囲気としてはあるんだなと感じました。

それから、特別支援学級にも、黒沼先生もそうですけど、本校の力量のあるエース級の教員を配置して、通常学級との交流を推進してきている歴史もあります。一緒にいることが普通の風景になっていて、子どもたちが通常学級に行って、授業を受けるのも日常的な風景です。特別支援学級の子どもとの関係性を見ていくと、思いやる、優しく接するといったような関係性が見られます。子どもたちが思いやるとか、あるいはできない子どもを手伝うといった気持ちはとても大事なことですが、思いやる・思いやられるという関係ではなく、配慮した上で対等な関係に進化させたいという思いが強くあります。それが本当の共生社会に繋がると考え、この紙芝居教材を入れることによって、少数派からの視点が得られるのではないかと考えました。

飯野：ありがとうございます。この後お話しますが、この教材は高学年向けではないかという話も出ています。しかし佐藤校長の中では、もう少し小さな学年から共生社会を実現していくために必要な知識や心構えを身につけてほしいという気持ちがあるのですね。

佐藤：そうですね。例えば、低中高で教材が一つずつ配置されている状態がいいのか、それとも各学年に一つずつ、1 年間で 1 時間程度の教材が配置されている状態がいいのか。ただ、2 年に一度そういったような授業をしても、果たして効果があるのかなって考えると、1 年間に 1 回そういった授業を経験することが理想だろうと思います。この車いすユーザーの教材は一つの授業ですので、例えば 1 年生も 2 年生も 3 年生も、同じ授業を繰り返して行うことはちょっと考えにくい。今日取り上げる車いすユーザーの紙芝居の授業に繋がるような教材を開発するのか、あるいは道徳の教材と繋ぎ合わせるのかが課題になっています。

飯野：ありがとうございます。次に、この間、富士見小学校でどういった形で取り組みが進められてきたのか、黒沼先生からお話しいただけますか。

黒沼：黒沼です。よろしくお願いします。まず昨年度２月、校長講話で、一人ひとりの子どもの特徴は人それぞれで、困っている人には配慮をしましょうということで、野球場に観戦に来ている子たちのイラストを全校に見せて、全校児童に感想を書いてもらい、校長先生が昼の放送で感想を紹介するという活動を最初に行いました。それを受けて、４年生２クラスの担任２名が飯野先生、平林先生からレクチャーを受けて、どんな授業をしていくかという確認をした上で車いすユーザーの社会の授業を実施しました。

３月には、校長先生が６年生２クラスに向けて授業を実践しました。３月の卒業間近の時期でしたが、私が担任していた特別支援学級の子たちも入って、授業を受けました。そして今年度４月に社会モデルについて職員全体で理解したいということで、飯野先生が作ってくれた社会モデルについての解説動画を視聴させていただいて、全員で確認し、私の方からリモートで朝会をし、特別支援教育や障害についての話をしました。

それらも校長先生が全員に感想を書かせてくれたので、昼の放送で紹介し、学校だよりに校長先生がまとめてくれたものをホームページにも載せるという活動をしました。５月に校長先生が「ひび割れ壺と少年」の読み聞かせを朝会でされて、それを受けて６月に、６年生３クラスに向けて車いすユーザーの授業を実施しました。以上のような流れで１学期は活動しました。

飯野：ありがとうございます。この授業を実践していくにあたり、注意した点はありますか。先ほどのお話だと、社会モデルの考え方を全教職員で共有するために動画を見たということでしたが、その他、どんなところに注意を払いましたか。

黒沼：やっぱり初めて見る子どもたちも多いので、事前資料をプリントとして用意して、初めてでもわかりやすくなるよう配慮しました。

飯野：今日は参加されていませんが、昨年度4年生の授業を実施してくださった先生からは、紙芝居のお話部分がちょっと長いんじゃないかっていう感想もありました。そのあたり、黒沼先生、佐藤先生はどんなふうにお感じですか。

黒沼：私は6年生にしか実施してないんですが、45分の授業で進めていくには、解説

とかが多いので若干長いような気もしますが、必要な部分かなと感じています。

佐藤：黒沼先生に補足してですけど、事前に社会モデルについての教職員の理解啓発が不可欠というところでレクチャーをいただきました。あと、私が校長講話で取り上げることで本時までの動機づけというか、雰囲気作りをしました。教員的には「布石を打つ」とか「種をまく」なんて言い方もするんですが。校長講話で気持ちを揃えていくといいますか、気持ちを向かわせていくこともしました。

あと、どこまでを狙うのかという確認をしています。つまり、関心を持たせるレベルでいいのか、それとも理解させるところまで狙うのかってことですね。飯野先生からは、この授業については今まで普通に思っていたことに対して「あれ」って思うような、揺らぎみたいなものを感じられるだけでも十分じゃないかというお話があって。それでちょっと気持ちが楽になったんですけど。実際、子どもたちはかなり揺らぎを感じているなっていう感触がありました。

もう一つ留意したのは、紙芝居の量とも関係があるんですが、学校はとても授業がタイトに入っているものですから、2 時間とか 3 時間は取れないと考えた時に、1 単位 45 分で扱える内容にしました。最初 4 年生でやった時には、紙芝居を全部示したんですが、私や黒沼先生がやる時には紙芝居の枚数を厳選して、1 時間に収まるような工夫をしました。意見交流も非常に大事だし、書く時間、つまり自分と向き合う、自分なりに考える時間も必ず入れなくてはということで、その辺のバランスを考えて、1 単位 45 分で終えることを基本に準備しました。

2. 見えてきた課題

飯野：ありがとうございます。では次に、実践してみてお二人がどんな感想を抱いたか、あるいはどんな発見があったのか、そして生徒からどんな反応があったのかをシェアしていただけますか。

佐藤：まず私の方からお話します。黒沼先生、フォローも含めて、後でよろしくお願いします。実践してみた感想はかなりたくさんあるんですけど、まず一つ目は、実践へのハードルが高いなということです。授業を1時間するだけでは、子どもの行動変容につながっていくところまではなかなか難しいなと思いました。それで自分としては、教育活動全体で推進していく必要があるなと考えています。つまり、1時間の授業とか、道徳の授業だけではなくて、教育活動全体で推進していく必要性がある。具体的に言うと、この社会モデルという考え方を人権教育の取り組みの中で推進していこうということで、今年度から黒沼先生をチーフとして進めています。

それから、授業者についてですが、今回特定の教員に固定されているイメージがあ

ると思います。ですが、この授業を45分でまとめるというか磨き上げていく段階では、授業者を固定して授業を行うことも有効だと思います。つまり、同じ人が授業をやることによって、精度が上がっていくというんですか。そして、ある程度本校としての枠組みができた段階で、一般の先生にもやっていただく方がハードルが低い、その方が効率的かなと思いました。

ただ、いずれは担任がやった方がいいとは思います。なぜかと言うと、さっきの実践場面ですね。これを実践的にやっていく場合に、社会モデルのポイントを押さえて価値づけたり、働きかける機会や時間は、担任の方がずっとあるわけです。そうするとある程度の授業の枠ができて、それを担任がやって、そしてそれをもとに子どもたちの行動を取り上げていくという回転ができるかなと思います。

あと、単発の１時間の授業だけでは単なる知識というか、その時だけで終わってしまうので、先ほどの校長講話なども入れ、シリーズ物とかパッケージにして、点としての授業ではなくて、もう少し線のような感じ、そして教育活動全体で面になるみたいな、そういった意識も必要かなと思いました。１年生から６年生までの系統的な視点も必要で、各学年で実施するのか、2、4、6年生で実施するのかというところもあらかじめ考えておかなくちゃいけないし。だとすると、１年生の授業ってどうなるのかなとか。枠組みがしっかりしていかないと、今後、本校で、この社会モデルの授業を毎年ある学年が行っていくというところも、持続が不可能になってしまう。つまり、この先生だからできたとか、この時だからできたっていう形にするのはもったいないと思います。今考えているのは、例えば、自然教室や修学旅行、運動会など、合意形成や配慮が必要な場面と関連させて指導するということです。

紙芝居は、読み手である担任が途中で補足できる点で使い勝手が非常に良いと思いました。それから、紙芝居のストーリー自体も自分に置き換えやすくて、子どもの感情を非常に刺激しました。例えば車いすバスケットボールのシーンなどですね。そういうシーンに理不尽さを感じて、非常に共感的に内容を捉えられるようになっています。でも、今の社会のあり方まで考えることは、かなり難しかったなと思います。少なくとも気づいて声をかけるとか、そうした声を拾って全体に紹介するとか、そういうことはできそうだと思うんですが、社会を変えるところまで行くのは、小学生としては難しいかなと思いました。

あと、他の人がやっている授業を見て思ったんですけど、紙芝居から離れて一般化するような場面があったんです。つまり、少数派が不利になっているような場面が他にもないですかっていうふうに。そこは非常に難しかったです。そもそも子どもたちは、少数派の視点から日常生活を捉えたことがないので、非常に困惑していたといいますか、ちょっと難しくて、子どもたちが立ち止まっていたような感じがします。

ただ、左利きの存在っていうのがやっぱり各教室で出てきて、それについては当事

者の言葉に共感していました。しかし、左利きがいないクラスでは理解が深まらなくて。教室の中の多様性の意義が、そこにあるんじゃないかなと。つまり、教室の中に様々な人がいることが大事なんだということを、その時に感じました。左利きがいないクラスでは、誰からも左利きという発想が出なかったし、左利きっていうことをサジェスチョンしたけれど誰もいなかったので、そういった子の困り感について想像するのが難しかったのでしょう。あとはですね、共生社会で大切なこととして、「思いやり」「協力」から、授業後には「少数派」という言葉を子どもたちが新たに獲得したことが感想からもわかりました。

授業の実施学年と時期ですが、発達段階からやっぱり 6 年生ぐらいが適当かなと思いました。なぜかというと、5 月、6 月に社会科で政治の働きを学習するんですね。その時、「みんなが住みよい社会」を扱って、そうした社会を実現するための政治の仕組みを学びます。そうした授業と関連させると、よりよい社会を作っていくためにどんなことができるのかリアルに捉えることができるかなと思いました。以上です。

飯野：ありがとうございました。紙芝居を見たことがない人に向けて補足させてください。今、佐藤校長のお話の中で、バスケのシーンっていうのがありました。この紙芝居の主人公は A さんといいます。A さんは男の子にも女の子にも見えるように描いてもらいましたが、どちらかというと男の子に見えた子の方が多かったかもしれません。A さんは二本足で立って歩く側です。つまり紙芝居の世界では少数派です。A さんは車いすバスケットボールのチームの大ファンで自分も車いすバスケをやりたいって思っているけれど、普段から車いすに乗り慣れているわけではないのでみんなに混じってやるのは「危ないから」とか「うまくできないから」っていう理由で、他の子たちと一緒にバスケをすることはできないっていうシーンが前半にあります。その部分についてお話いただきました。

このシーンで A さんは仲間外れにされてしまう、排除されてしまうので、子どもたちは「ひどい」と感じ、そこでまず心が揺さぶられる。そういうシーンになっています。道徳教育ではああいったシーンが結構重要になるってことで、今回教材の中に入れています。ですがこの教材自体は、道徳の時間にやってもらうことを念頭に最初作ったわけでは必ずしもないので、他の授業で使っていただいても良いかなと思っています。また、単発の紙芝居の授業だけで何かが劇的に変わるわけではないので、皆さんの学校ですでにやっておられる活動や他の授業と結びつけることで、連続した学びを実現していっていただきたいです。佐藤校長からも同じ課題感を出していただきました。黒沼先生からも何かありますか。

黒沼：私もどうやって進めていくか迷いがあったので、飯野先生からいただいた指導

案を元にプリントを作成し、それに基づいて６年生３クラスの授業を実施しました。昨年度、４年生に実施した時、共生社会という言葉は難しい気がしたので、「すべての人がともに生きる社会」と捉えなおして授業を進めました。

「共生社会にしていくために必要なこと、大切なものは何ですか」と最初問いかけて、紙芝居の車いすユーザーの社会を確かめ合う。そして、そこにある疑問点を出し合って、なんでこんなおかしなことになったのか子どもたちと確認し合いました。その後、現実の生活、今みんなが生活している中ではどうだろうと問いかけましたが、この視点の転換のところが、やっぱり難しいところだと授業をしていて思いました。そこでは、少数派の意見がうまく反映されていない事例を出し合うんですが、左利きは身近な部分かなと思って、私もヒントを出したりしましたが、実際に左利きのいるクラスは出やすいんですが、いないところは出にくいっていうところがありました。

それを踏まえて最後に、授業を受けて自分が考える共生社会はどういう社会かを子どもたちに出してもらい感想を書いて終わる 45 分の授業でした。その中で、子どもたちは、最初は「差別しない」「思いやり」「助け合う」とか、そういうことが大事な社会を共生社会として捉えているんですが、そこから「少数派の意見を取り入れる」という意見への変化が見られました。どうしても言葉としての理解なので、実感とか実践まではこれからだと思います。共生社会に必要なものについても、「思いやり」「優しさ」「助け合い」「差別しない」の他「法律」という意見もあったりしました。「平等」「配慮」といった言葉が出たのは、校長先生の講話などが布石としてあったかなと思います。関心のある子の中にはジェンダーとか「男女差別しない」とか、「ユニバーサルデザイン」などが最初から念頭にある子もいました。子どもの実態に差があるのは当たり前ですが、そのことがわかって良かったなと思います。

子どもたちの疑問としては「どうして一緒に遊べないのか」「歩くことを禁止するのはやっぱりおかしい」「（マジョリティである）車いすの人のことだけを考えるのは差別だろう」があげられました。そうしたことを直感的に感じられるのは、この紙芝居のわかりやすいところかなと思います。「そんなに苦しいんだったら、Ａくんが車いすに乗っちゃえばいい」という意見があって、面白いなと思いました。

少数派とはどういう人たちなのかというのは、子どもたちからはなかなか出ない部分だなと思いました。障害のある人、車いす、めがね、18 歳未満が選挙できないこと、LGBT の人。これらはクラスの中で少数派の事例として出てきたものです。

授業を通して、共生社会はどういう社会か、子どもたちと確認しました。子どもたちが書いた感想には「少数派の人の意見をしっかり聞く」「誰もが便利で暮らせる」「不便のない、誰もが不便さを感じずに生きていける」「少数派の人も多数派の人も住みやすく差別のない」「生きていて楽しい」「少数派の気持ちも受け入れる社会」「少数派の人も居心地がいい社会」「生活が不便な人の意見を取り入れてみんなが住

みやすい社会」「多数派でも少数派でも暮らしやすい環境をつくること」「どんな人にもどんなものがいいのかどんなものが悪いのかを聞く」などが見られました。

「車いすユーザーと二足歩行者をわければいいんじゃないか」、つまりマジョリティとマイノリティの生活する場をわければいいんじゃないかという意見は書かないまでも、どのクラスでも出てきます。それを聞き流すような場面もあったり、「そういう考えもあるよね」と受け入れた場合もありました。子どもの反応やクラスの状況を見て「そういう考えもある」と、すべての意見を受け入れた方がいいと感じてそうした場合と、共生社会はすべての人がともに生きていく社会なので、わけないでどうするかを考えてほしいと話した学級もありました。

私自身としては、お互いをわけて住んだりしていると、そこに人びとの溝が生じ、理解し合えないまま勘違いや憶測を呼んで、お互いに分かり合えなくなってしまうと思います。高学年でも難しいかと思うんですが、わけることが争いの元になるということを、いろんな事象をもとに説明していければいいのかなと授業をした後に思いました。お互いを尊重し合えるようになることが、お互い一緒に安心して暮らしていける要素になると思っています。

実践者としては、6 年生児童にとって、車いすユーザーの社会の紙芝居は、ねらいに沿ってほぼ理解できる内容だし、少数者である A さんが受ける不利益を直感的に感じることができる教材だと思います。先ほどもお話があった通り、多数派の人だけに合わせて社会を作っているとそれに合わない人たちはとても困ってしまうことを自覚できると思います。そこを全員が理解することは難しいと感じましたが、子どもたちの感想からは、理解できている子たちも結構多くいたなと思います。

実際は多数派である子どもたちが多いので、現実の社会においては偏りが見えにくいという理解は難しいのかなと思いました。多数派は気づきにくいと理解することこそが大事だと思うので、少数者の意見を尊重するとか、少数派の意見を聞くことの重要さを共有してどうしていけばいいかを考えていくことが大切だと思います。これからの実践を通して子どもたちと学校生活の中で積み重ねていくことが大事だと思います。共生社会を「すべての人がともに生きる社会」として最初に捉えましたが、6 年生にとっても、「すべての子どもたちにとって暮らしやすい社会」とした方がわかりやすいと、授業後のアドバイスもいただいたところです。私からは以上です。

3. 起きてきた変化

飯野：ありがとうございました。実際に実践してみた感想と生徒からの反応をお聞きしましたが、授業後少し経っているクラスもあります。特に昨年度、この授業を受けた子どもたちは、半年ぐらい経とうとしていますが、現在この授業が学校全体にどういった効果をもたらしつつあるかとか、学校の中で、社会モデルという言葉を使うか

どうかは別として、多数派と少数派との関係性を変えるという観点から、これまで見られなかったような現象は起きていますか。何かありましたら、お話ください。佐藤校長からお願いできますか。

佐藤：教員の変化ということで3点、子どもの変化ということで2点お話しします。エピソード的なところもあるんですけども、まず教員の変化として、周りの子を育てようとする意識が出てきたのを感じます。これは黒沼先生のことです。黒沼先生は今まで特別支援学級を担任されているんですが、先日、通常学級の担任の先生に非常に興味があるっていう話をされたんですね。どういうことかなと思って話を聞いたら、こういった共生社会とか社会モデルを広げていくためには、周りの子どもたちの教育、周りの子どもたちの意識が非常に大事なので、周りの子どもたちこそ育てなくちゃいけないんじゃないかと。黒沼先生の問題意識・課題意識が、特別支援のお子さんの周りの子どもたちの育ちや教育・指導にも向けられていることが心に残りました。

二つ目ですが、本校は学校研究で特別活動も推進していまして、去年4年生の授業をした男の先生の学級会の授業研がありました。学級会で子どもたちの意見を取り上げる際、黒板の上段に意見、中断に賛成、そして一番下に「心配なこと」と板書されていました。普通は「反対意見」とか「反対」と書くんですが、「心配なこと」となっていて。合意形成をしていく時、どうしても多数派が中心になってしまうわけですが、心配なこととか、あるいは反対って手を挙げて主張するまではいかないにしてもちょっと引っかかりがある、モヤモヤしているという意見を捉えようとしている学級会の仕組みといいますか、とても心に残りました。

三つ目は、授業実践はしなかったのですが、「クイズ＆ギャンブル・ゲーム」を通した社会モデル理解の研修を受けた先生が、子どものトラブルの対応で、今まではどちらかというと当事者同士で事実関係を確認して解決する指導だったのが、周りの子どもたちへの声がけも併せて行うようになったという事例がありました。実際の場面は見ていないのですが、トラブルがあった時に、「周りの子がどんなふうに関わればこういう事態にはならなかったの？」と、周りの子にも考えさせるようなサジェスチョンといいますか、声かけ、働きかけをしているという報告がありました。これもひとつの変化かなと思いました。

子どもたちについては二つあります。一つは、去年、2年生なので紙芝居の授業を受けたわけじゃないんですが、配慮という言葉が出てくるようになりました。校長講話で「ひび割れ壺と少年」という絵本の読み聞かせをした時のことです。このお話には、天秤棒にぶら下がっている二つのツボが出てくるのですが、片方は割れているんですね。割れているから水が漏れてしまって「自分は駄目な壺だ」と言っている。しかし、水くみをする少年がひび割れた壺を花の種をまいた側に持っていく。毎日水く

みをする中で、割れたツボは水は運べないけれど、道端の花を美しく育てていく。最後はご主人のテーブルの花として飾られたということで少年がひび割れ壺に語りかける。そういうお話をしたんです。すると、2年生の子どもが感想の中に「これって配慮だよね」と書いていました。学習したこと、その時に獲得した言葉や考え方はそういうところにリンクしていくんだなと感じました。

二つ目のエピソードは、先ほどの4年生の学級会です。ちなみに、この学級の子どもたちは紙芝居の授業は受けていません。担任の先生が去年授業実践をしたので、先ほど紹介したような働きかけや工夫をしているのだと思います。そして、ある日の学級会で、お楽しみ会の内容を決める話し合いをしていた時「心配なこと」として意見を出した子が2人いたんです。お楽しみ会で、ドッジボールに決めましょう。多数派がドッジボールってなって、決まるって時に、心配な意見が二つ出て、司会者が「大丈夫ですか」って聞いていたんですね。その2人の子が誰なのかメモしていなくて私はわからなかったんですが、学級会を進めていた子は名前までしっかり覚えていて、その子たちに「大丈夫か」と確認したのです。そうした対話をすることで「大丈夫です」となり、お楽しみ会の内容が決まったというエピソードがあります。昨年度4年生を担任した先生の教室で社会モデルの考え方が活かされていて、それが授業を受けていない子どもたちにも伝わって、そうした発言につながったということで、とても嬉しく思ったエピソードでした。

飯野：ありがとうございます。最後のお話、私もとても嬉しく聞きました。紙芝居の授業の効果がどうこうというより、先生たち自身が社会モデルの考え方を学んでくださって、それを活かしてくださっているからです。先ほど校長先生からあった「クイズ＆ギャンブルゲーム」は、社会モデルを体感するゲームのことです。最近は、あのゲームをした後に、学校の中の偏りを発見するというワークショップをやっており、それを富士見小学校の先生たちにも受けていただきました。そのことで、社会モデルの考え方が少し学校全体に広まりつつあり、実際の指導にも活かされている可能性があるのだとすると非常に嬉しいです。

佐藤：ちなみに、今回変容が見られた先生方は「クイズ＆ギャンブル・ゲーム」を経験しています。私もこのゲームの仕組みがわかった時、非常にショッキングでしたが、それが一つの転機になりました。その時の衝撃がやっぱり原点にあって。研修をする時、受身だと、それだけでは先生方は動かない。やっぱり体験とか対話、ゲームが終わった後に誰かとそれを分かち合ったりするような場面をセットにしていかないといけない。今までの教職員研修のような、偉い人の話を聞いて、それで終わりです、後はそれぞれご自分で取り組んでくださいっていうような形だと、やっぱり弱い

のかなと思います。
　今年度の初めに飯野先生からレクチャーをいただいたんですが、それを聞いた後に先生方が隣の人と話をする場面を作りました。そんなふうにアウトプットするような場面とか、社会モデルって何なのかについて語り合う、話し合う時間をちゃんと位置づけていかないと、先生方の頭の中で通り過ぎてしまう。その意味で、「クイズ＆ギャンブル・ゲーム」のワークショップは、とても力のある教材だなと思っていて、おすすめしたいです。以上です。

飯野：ありがとうございます。では、黒沼先生の方から補足がありましたらよろしくお願いします。

黒沼：私は特別支援の担任です。富士見小学校では交流学級に取り組んでいるのですが、通常学級の中に入るとお客様状態という場面がないことはないんですが、その中でも学級の中に入って体育の活動を一緒にやる中で、周りの子たちが声をかけてくれたり、自分から入れたりということが出来てきました。
　直接社会モデルと関係するところではないかもしれないですが、今まで出席番号が、特別支援学級の子たちは交流学級の名簿の一番最後にあったんです。偏りって言うか、溝があったと思います。それを交流学級のあいうえお順の中に入れてもらうことで、一員として扱うとか、整列する場面でも後ろではなく間に入ったりとか、そういうことをすることによって、子どもたちの意識として溝がなくなっている、当然入るところに入っているという感じで捉えられてきているという印象を持っています。
　あと、授業したことによって、劇的に変わるわけではないんですが、子どもたちの中にちょっとした気づきが出てきているのかなというのは感じております。

飯野：ありがとうございます。一つの教材を使った授業実践ですが、それをしていただくにあたって、担当する先生方はもとより、その学校の先生たち全員に社会モデルの考え方や、なぜそれが学校の中で大事なのかを少しずつお伝えすることで、学校の文化や、これまでやってきたやり方に変化が起きたらなと私自身も感じています。ここで、参加されているみなさんから質問やコメントを出していただきます。

4. 学校の中で「社会モデル」をどう実践できるか

星加：佐藤先生、黒沼先生、貴重なお話をありがとうございました。富士見小学校の中で佐藤先生もおっしゃっていましたけれども、授業実践が点で終わることなく、線や面に広がってきつつあるプロセスを感じられて、私も非常に心強く、素晴らしいなと思って聞かせていただきました。
　私も学校をはじめとして様々なところで社会モデルの考え方を伝えるための実践を

続けてきているんですけれども、その中でやはり難しいなというか課題だと感じていることがあります。それは、社会モデルという考え方を配慮や支援の文脈に関連付けながら伝えていくことの難しさです。この点について、先生方のご意見とか実践してみての感想などお伺いできればと思います。

難しさについて大きく分けると二つあります。1点目は、とりわけ黒沼先生にお伺いできればと思います。黒沼先生も学校の中で、特別支援についての考え方や具体的な配慮のあり方などについてお話をされていると思います。ただ、具体的にこういうサポートが必要だよねとか、こういう配慮をするとうまく一緒に活動ができるよねということを伝える時、社会モデルの説明をするよりも、その子にはこういう障害があるからとか、こういう特徴があるからこういう配慮が必要だという話をした方が、ダイレクトに伝わりやすいというか、聞いている人にとってわかりやすさがあるのかなと感じています。つまり、社会モデル的な説明の仕方よりも、個人モデル的にその人自身の障害に関連付けて配慮を説明した方が伝わりやすい部分があるのかもしれないと。黒沼先生は、社会モデルという考え方とその具体的な行動としての配慮を繋げて説明するところで何か難しさは感じておられないでしょうか。また、両者をつなげて説明される時、工夫があったら教えていただきたいです。

2点目の難しさとしては、これは学校だけではないんですけれども、やはり学校においても、社会モデルをきちんと先生方にも、児童生徒の皆さんにもお伝えしていった時に、突き詰めて考えていくと、今の学校のあり方そのものの中に多数派に合わせて作られているところがあるんじゃないかという話に行き着いてしまうかもしれない。つまり、先ほど少しずつそうしたあり方を変えていく実践も起こっているというお話をいただいたので、すごく心強く思っているんですけれど、学校そのものの中にある偏りに気づいてしまうことがあると思います。

ちょっと踏み込んだ発言になってしまうかもしれませんが、学校が通常級と支援級という学ぶ場がわかれた形で成立していることそのものをどう考えるかとか、そういう話にもつながってくる話だと思っていて。佐藤先生からも左利きの話をしていただいた時に、その場に多様性がないと多様性についての理解がなかなか進みづらいというお話をいただきました。それをつなげて考えると、例えば学校という場の中で実際に通常級と支援級というわかれた場が存在していることを当たり前として過ごしている子どもたちにとって、そういうあり方を相対化するというか別の可能性を考えることはなかなか難しい部分もあるのかなと。社会モデルの考え方をきちんと伝えようとすると、そういう学校のあり方そのものを捉え直す話にまで発展しかねない難しさがあるのかなと考えたりするんですが、佐藤先生は何か感じておられないでしょうか。

飯野：では、1点目は黒沼先生にお答えいただいて、補足があれば佐藤先生にもお願

いします。2点目は佐藤先生の方からお答えいただいて、補足があれば黒沼先生からしていただきます。

黒沼：私も特別支援学級の担任をしていて、音が苦手な子も実際にいるんですが、その中でどうしようもない場面なんかももちろんあるんです。消火設備の点検なんかの場合に、「音が鳴ります」みたいな放送はあるんですが、予告があっても、音が鳴ると、耳をふさいでパニック状態になる子たちがいて。それを受けて「何とかなりませんか」という状況には今のところなってないです。また、運動会のピストルの場面でも、この子は音が苦手だから笛でスタートをさせてくださいという提案は実際はできるかなと思うんです。でも、それだと個人モデル・医療モデルからのお願いで、その方が周りも受け入れやすいという現状はあるように思います。

　それを、他の子でもサイレンやピストルが苦手な子もいるわけなので、「別の方法を考えてみませんか」っていう提案はできるかなと思います。こちらの提案に対する周りの先生たちや子どもたちの反応を受けて、お互いに話をしていくこと、対話していくことが大事なのかなと、今のところ思っています。お答えになっているかわかりませんが、一つ目の質問については以上です。ありがとうございます。

星加：黒沼先生、ありがとうございました。すごく参考になりました。話の出発点としては「それでは困る人がいる」という個人モデル的な、個人に関連付けたような形で問題提起をするのがわかりやすいのかもしれないし、対話をスタートさせるっていう意味ではそこが出発点になる。でも、対話をしていく中で、「校内放送って、当たり前のようにこういうやり方でやってきたけど、これってどこか偏ってなかったかな」とか、「一部の人を忘れちゃってなかったかな」みたいなことに気づいていく。社会モデル的な理解を対話を通じて広げていく形で進めておられるのかなというふうにお聞きしました。ありがとうございました。

飯野：二つ目の質問に対して、佐藤校長、お答えいただけますか。

佐藤：星加先生のおっしゃるのはその通りだと思います。通常級と支援級をわけるところから疑問を持たれている、あるいは交流っていう言葉自体に違和感を感じていらっしゃる方もいると思います。ただ、社会モデルの実現といいますか、そういった考え方の普及まで、なかなか一足飛びにいかないというのが現状かなと思います。研修を通して、あるいは飯野さんの講話を通して、先生方の間にも少しずつ浸透しているとこですが、まだまだ課題があるなと思います。

　特に今私が問題意識を持っているのは、学校の中にある様々なルールですね。そう

いったようなものが少数派にとって不利になってないかを考えています。例えば、授業の開始と終わりの挨拶ですね、号令とか。あるいは、ノート指導ですね。板書って言いますが、黒板の字を写すとか。あるいは体育や全校の集会で整列するとか。そういった場面で、お子さんにとってはかなりきつい場面があるのかなと思って。

ただ、整列はしません、挨拶もやりません、ノートも取りませんっていう極端な話になった時に、やっぱり例えば保護者であるとか、それから先生方の、今までの当たり前に対する考え方とかがありますので、そこを話してわかっていただくような形にしていかないといけないのかなと。つまり、当たり前と思っていることに疑問を持っていたとしても、立ち止まって、職員や保護者と対話をしながら考えていくのが、時間がかかるけれども正攻法かなと思っています。

特に学校経営を進めていく時、保護者の理解協力というのは非常に大事なところです。ですから、私としては学校だよりで、なるべく学校でどういうふうなことをしたいと思っているのかとか、あるいは共生社会について校長はどのような考えを持っているのかを書くように心がけています。そうすると協力をしてくれる方もいるでしょうし、また、「そういった考えなのか」ということで啓発にもなるので。地域保護者に向けて協力を得ていく段階もとても大事に考えています。通常級と支援級がないようにしていくのがやっぱり理想であるとは思うんですが、一気にそこまでいかないと。例えばですね、先ほどのエピソードで言うと、当事者同士のトラブルで、周りの子に働きかけをしたという担任の先生のお話ですが、そういう時、「当事者のトラブルなのに、どうして周りの子が注意されなきゃいけないんだ」と捉える保護者の方もいらっしゃるんですね。一気に進めようとすると副作用といいますか、そういったようなものも出てくるので、丁寧に進めていきたいと思っています。星加先生のおっしゃるようなゴールを見据えながらも、着実に少しずつ理解を得ながら進めているのが現状です。そういう迷いを感じながら進めています。以上です。

星加：ありがとうございます。非常に参考になりました。ゴールをきちんと見据えた上で、現実的に何をどこからどうやって変えていくことができるのかというところに熱い思いを持ってチャレンジをしておられるということですごく励まされる思いです。今のお話を伺いながら思ったのは、やはり先生方の中にもあるいは保護者の皆さんの中にも、当然これまでの当たり前っていうものが存在しているわけで、そこを変えていくことが必要なんだけれども、変えていくにはいろいろな軋轢も伴うかもしれない、摩擦が生じるかもしれないので、丁寧に対話を通じて、アプローチしていくということの重要性を改めて感じました。

具体的に何かトラブルが起こった時に、狭い意味での当事者に関連付けて、そこに問題の原因を帰属させて考えるような理解の仕方が当たり前になっているというお話

をいただきました。そういう具体的な当たり前のあり方が学校現場でどんな感じになっているのかを、今後ぜひいろいろ教えていただきたいなと思っています。ゴールを設定して理念を語ることは簡単ですけど、佐藤先生がおっしゃるように、具体的にどう変えていくのか、どこにどう働きかけていくのかというところが実践的にはすごく重要なのでそういうヒントをまたいただきたいです。今後ともいろいろ勉強させていただければと思います。ありがとうございます。

佐藤：すいません。さっき言い忘れたんですが、自分が頭の中にあるのは保護者の理解もそうですが、持続可能かどうかということもあるんです。例えば、富士見小学校で行っているものが、校長が変わった時に、それがまた繋がっていくのか。あと、中学校との繋がりも非常に重要です。中学校との連携の部分も丁寧に扱っていかなくちゃいけない。目配りしながら、人が変わっても学校や地区に根付いていくか、最終的に持続可能かは考えているところです。

飯野：ありがとうございます。点から線や面にというのは、富士見小学校から他の学校や中学校に、さらには地域全体に広げていくという意味だと思います。そのためには、人が変わっても実施が継続されるようにしておくことが重要で、その方法を探求されているということですよね。ぜひ一緒に考えていきたいので、またお話を伺いたいと思います。ありがとうございます。

　ちなみに、持続可能性に関してですが、例えば富士見小学校を超えて、地域に対し、あるいは中学校に対し、こういう働きかけができそうだという感触や計画が、現時点で佐藤先生の中でありますか。

佐藤：いま酒田市の第六中学校の学区で、特別活動の東北大会と県大会を令和5年度に控えています。そこで中学校と、私の学校と隣の小学校二つが第六中学校の学区全体で、特別活動を推進していくことがタイムテーブルに乗っかっています。その中で、先ほどのような学級会の実践を紹介し、広げていけるかもしれない。あるいは、中学校に今の六年生が上がっていきますよね。中学校は本校の卒業生が大多数なので、生徒会にも影響が出てくるのでないかと楽しみにしています。

飯野：ぜひ期待したいですね。そこは息の長い取り組みだと思うので、一つの授業で完結するものではないし、1年生から6年生まで教えればそれで済むというわけでもない。もっと広がりをもった形で展開していくにはどうすればいいのか、それぞれの地域の特徴、制度、仕組みをうまく活かしながら、進めていけたらいいなと思っております。みなさま、本日はありがとうございました。